

飛翔するスナイパー

諸石康太 PZ、頭腐メンタル

夏休みのある日のことである。炎暑が続き、蟬の鳴く声が人々の鼓膜を揺らす。この日は秋越中学校の体育館には二つのバトミントンコートが用意されていた。

「それにしても体育館をバスケ部もバレー部も使わない日なんて珍しいな」

髪を短く切り揃え、パツとみて男かどうか分からないような外見をしている少女がいった。彼女は相生榎並(あいおいえなみ)。2年生であり、秋越中学校のバトミントンのキャプテンだ。

「今日はバスケ部もバレー部も合宿らしいですよ」

そしてその質問に対して答えたのは夙川佐古(しゆくがわさこ)。このバトミントン部唯一の1年生である。髪は長めで大人しそうな少女である。

「ふうん。なるほどね……」

そして相生はニコッと笑みを浮かべる。

「それなら今日は苦情が来ることなくゆっくりバトミントン出来るのか」

「むしろこの時期にバスケ部とか合宿に行っている理由はバトミントン部が原因のような気がしますけど」

というのもバトミントンという競技は風に弱い。だから例えどんなに猛暑の日でもバトミントンをするときには窓を完全に閉めないといけない。その結果、体育館の中はサウナの中のような状態になってしまうのだ。夏の体育館で35度越えは普通だ。その上湿度も高いから南国の湿潤な気候がこの体育館に再現されてしまうのだ。良く言えば体育館にいいだけで沖繩(気温だけ)行った気分になれる。そして勿論それはバスケ部などにも協力してもらおう。その際に文句とかはよく言われる。

「せっかく他の部活が休みなのでドンドン試合しましょう」

「そうだ、そうだ！ とにかく試合がしたいのだ」

そして見かけが一緒の二人はこういった。どっちも同じように髪を後ろに結んでいた。ただ違いは一方はメガネをしているのだ。眼鏡をしている方が、飾西江間、していない方が飾東江美だ。雰囲気似ている為よく双子に間違われるが実は違う。

「よし、ならまずは軽く打つか」

そういうと飾西、飾東の二人は元気よくコートへ向かった。

「佐古は私と打つか」

「はい！！」

そして相生と夙川もコートの中へと入った。

夙川は今年からバトミントンを始めた。つまりつい数か月前まで彼女はバトミントン未経験者だった。夙川は中学校に入って何かしらのスポーツをしようと決めていた。しかし団体競技で自分が責任を負うことを恐れていた。その為個人スポーツのバトミントン部を

選んだのだ。だがこのバトミントン部は去年新設された部活のため、人数は極端に少ない。

相生は上に高くシャトルを上げる。その落下地点で夙川は肘を弓のように引き、そして相手のコートの地面に突き刺すように返した。相生はその球をラケットの面にポンッと当てる。その球は夙川のコートにつかず、ネットにぶつかって落ちる。

「おっ、スマッシュを打てるようになったか」

「はい」

それから相生は何度も同じような球をあげる。そのたびに夙川はスマッシュを相手のコートに打ち込む。やがてはその打っていたシャトルの羽が二枚ほど花びらのように折れた。そして不安定な形となる。

「大分上達したな」

その言葉を聞くと夙川は頬を赤く染めた。

「それでもまだ……先輩たちには勝てませんよ」

相生は小学校の時からバトミントンをやっていた。そのせいか市内大会、阪神大会では上位に入ってくる。飾西、飾東も夙川と同じように中学校までバトミントン未経験者だった。しかし上達するのが早く、今では彼女達も阪神大会でダブルスとして上位に、そして県大会に顔を出すほど強い。

夙川達は10分程度打ったあと休憩をとることにした。なんせ体育館の温度は35度を上回っている。しっかり水分補給しないと熱中症で倒れてしまう恐れがあるのだ。

「それにしてもこのバトミントン部に応援歌が欲しいですね」

「そうそう。あと横断幕も欲しいのだ」

と飾東、飾西コンビが言う。

「別にそこまでのするための人数がいらないじゃん」

「それでもです。あるとないとでは大分モチベーションが変わってくるでしょう」

「うーん。まあ、考えてみるだけ考えてみるか」

「えっと、若鷹軍団とかはどうですか？」

と夙川は提案した。しかし他の部員達は少し渋い顔をする。

「えっと……ソフトバンクファンだったのか？」

「あっ、いや、別にそんなつもりで言ったわけではありません。ただ……まるでジャンピングスマッシュを打つときが鷹のようで」

「確かにそうかもしれないけど……バトミントンは別にスマッシュだけじゃないからな」

「ううう。まあ……」

ガラリと閉め切った体育館のドアが開く。そこに人が入ってきた。身長は夙川達よりも低く、髪をツイントールに結んでいた。ぱつと見て、ただの小学生だ。

その少女は夙川達の元に来た。少女の肩にはバトミントンのラケットケースが袈裟懸けされていた。どうやらバトミントン経験者らしいのだが。

「えっと……この子は？」

夙川は首をかしげながら聞いてみる。

「相生函南。私の妹さ」

「へっ……？ 妹？」

「ああ。私の天才妹だ」

函南は袈裟懸けしていたラケットケースを手を持ち、そこからラケットを取り出した。

「暇」

そして短いその言葉だけを告げた。

「暇って。夏休みの宿題でもやっておけよ」

「やったもん。全部終わったもん。もっと言えばお姉ちゃんの方も終わらしたもん」

「先輩、妹に宿題をやらしているのですか！！」

「まあな。函南にとって中2の問題なんてなんともないよ」

「……本当に天才妹ですね」

ついでに言えば相生の姉の方は数学27点と赤点ギリギリの点数をとっている。そして中学の勉強どころか小学校の勉強すらも危ういのだ。

「暇だから来た」

「勝手に中学校に来て……」

「私もバトミントンの試合したい」

「試合ねえ。私とはいつもやっているでしょ」

ちらり。夙川と相生の目が会う。

「よし、佐古と試合してもらおう」

「わ、私ですか」

相生はそう提案したのだった。この時函南の目がキラキラに輝きだした。

「一応言うけど私の妹は強いぞ」

コートの外で夙川は軽く準備体操をしている。

「先輩の妹ですからね。そこは分かっています」

「まあ、小学生だからって油断はするな」

「はい」

そして夙川はコートの中に入る。そして中央、ネットを挟み夙川と函南が対面した。

「この試合のルールを説明します。まずラリーポイント制の21点マッチ。1ゲーム制。

コートチェンジ11点。そして審判は主審のみ。線審はなし。アウトセーフ判定は主審に任せる」

今回の主審は飾東が担当することになった。そして今回、線審はいない。つまりすべての試合の審判の責任は飾東に与えられる。線審はとても大切な仕事である。特にサイドのセーフラインが短いシングルでは線審というものは絶対に必要だ。しかし人数が少ないために思うように線審を手配することができないのだ。

「先攻は夙川佐古。後攻相生函南。ラブオールプレイ」

飾東の掛け声により試合が開始された。

まず夙川はコートの奥を狙ってサーブを打つ。そのサーブは綺麗な弧を描いていた。そしてその球の落下地点にはすでに函南が立っている。函南はその球を夙川のコートへとはじき返した。それも弧を描いて夙川のコートへと向かうのだが、高さがそこまでない。さらには丁度、シャトルの落下地点に夙川は立っていた。つまりはこの球はスマッシュを打つのに最適な球なのだ。

夙川は相手のコートにめがけて、矢のようなスマッシュを打った。しかしその球はあっさりとは函南にレシーブされる。ただレシーブされたのではない。その球は夙川のいないコートギリギリの前の方に落ちたのだ。

返されると予測出来なかった夙川のフットワークは少し遅れる。その結果夙川は体幹を大きく曲げ、無理矢理シャトルをとろうとする。しかし慌てたフットワークで打ち返した球だ。リストスタンド(腕と肘の角度が90度の位置)より低くなり、函南のコートに飛んだ球は大きく浮いた。その球を逃さずに函南は夙川のコートにプッシュを打ち込んだ。

そしてその球は夙川のコートでワンバウンドした。

「サーブスオーバー1・0」

審判はそうコールする。先制点をとったのは函南だった。

(そんな……私のスマッシュを打つなんて)

夙川はそんな事を考えていた。正直、夙川は自分のスマッシュに対してある程度の自身はあったのだ。更に完全に決まったと思ったスマッシュを返り討ちされてしまったのだ。

それは偶然なんだろうと思いきや、今度のサーブ権は相手の方に向うつっていたのだ。

そして次のスマッシュを打てる、高くあがった球がくる。夙川はさつきと同じようにスマッシュを打ってみる。しかし結果はおなじだ。何も変わらない顔で夙川のスマッシュを返す。そしてやがて自分のコートに相手の打った球が地面に落ちた。

「2・0」

(なんで?)

夙川は困難していた。さすがにスマッシュを返すことができないと思っていたのに、自分より身長も年齢も低い小学生にいと簡単に打ち返されてしまっているからだ。

「江間はこの試合どう思う」

一方、コートの外では相生と飾西がこの試合を傍観していた。そして江間この試合を記録に記録している。

「夙川がスマッシュを打つ為にテイクバックを取っている間に、既に函南はリアクションステップをとっています。つまり相手のコートを見る余裕があるのです。そして次のターンに空いているところに打ち込まれて、それを打ちかえすにしても中途半端なフライトとなりプッシュやカットなどを打たれてしまう。ここまでその1パターンですかね」

「まあ……確かにな。しかしどうしてそんなことになっているかわかるか？」  
「それはシャトルを見すぎているからだと思います」

あれから試合は進み現在は9・6。完全に函南の流れになっていた。さらに体育館の室内温度は35度超え、それが夙川のスタミナを奪っていた。そして夙川の足は覚束なくなっているようだ。

函南はサーブを打つ。もうそのサーブを打つ力さえも残っていなかった。そしてそれを打ち返した後も函南の球は夙川がいないことに打ち込まれる。

「10・6」

(どうして)

シャトルは前に落とされた。夙川は体制を崩す。そしてその結果シャトルは空中に上がってしまう。そしてそのシャトルはブッシュでコートに押し込まれる。

「11・6、コートチェンジ」

そして圧倒的点数のままコートチェンジを迎えてしまう。

(どうして……)

そして相生が夙川の元へとくる。

「5点差か……だいぶ差がついたな」

「すみません」

「このままでは33-4と……」

「何ですか。阪神関係ないでしょ」

「そうだな」

夙川は肩で息をするような状態になっていた。言葉も所々に空気のような音が混じっている。

「どうして自分の決め球があんなに簡単に打たれるだろうって思っているでしょ」

「はい……」

夙川はうなずいた。

「それはだな、佐古のスマッシュが逆に相手のチャンスボールになっているんだよ」

「何ですか？」

「バトミントンはスマッシュだけだと思っているのか？」

「それは……」

「スマッシュだけじゃないよ。バトミントンに必要なものには速さだけじゃない。策略も必要なのさ」

「策略？」

「ああ。私の妹は佐古の打つ球をあらかじめ予測してフットワークをしている。そしてこのスマッシュが来るだろうという位置であらかじめリアクションステップをとっているんだ。その結果上手く返されてしまうわけ。だから佐古も私の妹の思考を読み取れば勝て

るさ」

「私にはそんな事できません……」

「そんなことはない。しっかり集中すれば何かを感じることが出来るはずさ」

「何かを……感じ取る？」

「ああ」

既に函南はコートチェンジを終えて、軽く体を動かしていた。函南はその表情がまるで高を括っているようにも見えた。勿論それは気のせいなのだが。それを見た夙川は急いでコートの中に入る。

「まあ、バドミントンには集中点があつてさ。そこに当たればコートさえも打ち抜ける弾丸が打てるそうさ。それを打つにしても感じないと駄目だけど」

そして意味深の言葉を相生は夙川の背中に言った。

(集中点？ 打ち抜く？)

コートにはいやらしい笑顔を浮かべている函南がいた。

(予測するんだ。多分点差があるから色々試してくると思う。でも一体何で来る？ 何も根拠はない。だけど……ショートサーブで来ると思う)

この試合は相手も敵も全部ロングサーブで打っていた。しかも函南の打つロングサーブは高くそして奥まで飛ぶ。その為いつも夙川はフットワークが遅れ、威力の弱いチャンスボールを相手のコートへと送りこんでいた。だから夙川はあらかじめサーブの時は少し後ろの位置にシフトしていたのだ。

函南はサーブを打つ。予想通りのショートサーブであった。ネットギリギリを低空飛行してそして夙川のコートに入る。既に前に来ると予想していた夙川はその球をとることは容易いことであった。そして打ち返した球は後ろのアウトラインギリギリまで飛ぶ。

(次はどこに来るのか)

夙川は前に来ると予想した。その予測は正しく前に落ちた。夙川はスピンをかけたヘアピンを打った。そしてら函南の球はネットの上に浮いた球となってしまった。夙川は函南のボディイーをめがけてプッシュを打った。コレには函南もとれない。

「サービスオーバー7-11」

ようやく夙川は1点返す。点差は4点になった。

(決まった……しかもあっさり)

「8-11」

そしてまた同じように点数が入る。点差が3点まで縮まる。

「大分点差が縮まりましたね」

「まあな。私がちよつとアドバイスしたから」

「へえ。それはどんなアドバイスですか？」

「それは秘密さ」

そしてそのまま互角の試合が続いて15-16まで来た。一点差。ここで点数をとれば

同点に追いつく。

夙川と函南は息を切らしていた。そして汗がコートの上に落ちて小さな水たまりが出来ていた。

(あと……1点)

それを考えると自然に夙川の心臓は激しく揺れてくる。手には暑さとはまた違う理由で汗が流れていた。

サーブ権は夙川が持っている。しかし中々打たない。これはこうやって時間を稼いで息を整えているのもあるし、それにここで絶対に点を決めたいという思いもあるからだ。

そしてサーブを打つ。函南はクリアーでコートの深くまで打ち返してきた。そして夙川はそれを打とうと上を見上げたが、照明とシャツルが重なる。思わず夙川は目をくらましてしまった。なんとかシャツルを打ち返したもののそれはカーンという鈍い音をだした。どうやらフレームに当たったらしい。そして軌道が不安定のまま函南のコートへと入る。

これはヤバいと夙川は感じる。しかしそのシャツルは不安定の動きをしているため函南も打ちかえすのが精一杯らしい。その球はネットの近くに大きく上がる。そして夙川はすかさずその球を打ち込んだ。

「16-16」

(まずい……このままでは)

函南は焦りを感じていた。

(私は年上に年齢が理由で負けたくない)

函南は昔からよく姉とバトミントンをしていた。しかし未だに勝てたことがない。それを見た周りの人からは姉の方が年上だから仕方ないよとかよく慰められたりするのだ。それが原因で年齢がコンプレックスになっていたりする。

「妹さん、だいぶ疲れていますね」

「ああ。正直持久力とかの基礎体力は佐古の方が上だからな」

「ならこの試合は佐古ちゃんの方が有利で……」

「さあな。だからこそあいつは今気合いが入っているし」

函南の足が棒のようになっていいる。もう体力の限界が来ているのだ。と函南の後ろにシヤトルが飛ぶ。その距離は普通に行けば間に合わない距離だ。もう夙川はポイントを取ったと確信していた。しかし函南は夙川の方を背に向けた。そしてその体制のままシャツルを打った。

「妹さん、あの体制からハイバックってすごいですね」

「まあ、私の天才妹だからな」

そしてその後体制を持ち直した函南が得点を決めた。

「やりますね」

夙川は思わずそう口に出してしまった。

「私は君に負けたくないからね」

「私もその気持ちは一緒です」

その後も粘った試合を続けた。一つ一つのラリーが長くなりそれが二人の体力をどんどん奪っていった。それでも二人の体は動き続ける。ドライブによる速い球の打ち合い、コートぎりぎりを狙ったショットのお互い打ったりしていた。

そして試合が始まってからすでに20分以上が経過していた。

「サービスオーバー20-19。マッチポイント」

先にマッチポイントを迎えたのは夙川だった。この時には汗により体操服がそば濡れてしまっている。

(あと、1点。あと1点だ)

夙川の神経は高ぶっている。そしてサーブを打った。これも他のラリーと同様激しい打ち合いになる。そして函南はクリアーを打つ。その落下地点にすでに夙川は立っていたのだ。

(ここで決めないと)

夙川は飛翔する。そして体をグイッとひねった。腕を大きく上げ手は深く引く。

(弾丸よ)

球はどんどんと夙川の方へと近づいてくる。

(コートを撃ち抜け!!)

そして素早くフォロースルーをした。その衝撃で夙川は地面に尻餅をついていた。球は函南の正面へと飛ぶ。

(これならレシーブできる)

函南はすでにスマッシュを打ちかえる体制を作っていた。そして函南のコートにまるでミサイルかのように球が飛んでくる。

(ジャストミート)

函南はうまく打ち返した、そう思った。しかし夙川のコートには球がない。素早く振り返ると既に後ろに球が転がっていたのだ。そしてスマッシュを打った衝撃でバトミントン羽が空中に散る。それはまるで白鳥が湖に飛び立つようだった。

(そ、そんな……確かに捉えたはずなのに)

「21-19。ゲームセット」

そしてここでゲームセットのコールがされる。その瞬間、夙川の心は坩堝と化した。そしてどっと疲れが夙川に襲い、マッチ棒のようになる。それでも足をガクガクとロボットのように動かしてコートの中央まで歩いた。すでにそこには顔を赤く染めている函南が立っていた。

そして夙川と函南は終戦の握手をした。

「こ、これが3ゲーム制なら私が勝っていたからね」

函南は切歯扼腕と悔しがっている様子だった。その握手する手はとても固くなかなか離すことはできない。



「それはどうだが。だってもう函南さんボロボロじゃないですか」  
「それは……」

函南の目はうるんでいる。目は口ほど物を言う。この時夙川は函南の目を見ただけで再戦をしたいと思っていることをわかった。

「でも楽しかったよ。だからまた一緒に戦いましょう」

「よ、よし次は負けないからね」

そういうと函南はいそいそとコートの外に出ていった。

(今度戦う時はもっと強くなっているかもですね)

これから労して練習に励む函南の姿が自然に夙川の頭の中に浮かんでしまった。

「私も練習に粉骨砕身しなきゃね」

そして体育館の舞台裏。夙川はそこで手足を伸ばして寝転がっていた。それはまるで綿のようだ。

「疲れたー」

すると夙川の顔に冷たい水が落ちてきた。相生が夙川の腹の部分に乗ってペットボトルに入っていた水をかけたのだ。

「せ、先輩！」

夙川と相生の顔は至近距離となっていた。

「お疲れ。どう私の天才妹は？」

「本当に厄介な強さでしたよ」

「まあな。正直よく勝てたと思う」

「確かに先輩のアドバイスがないと負けていた気がします。ところで先輩、バドミントンのシャトルって一体何キロでるんですか？」

「確かギネスに乗っているのでは493キロだったかな」

「よ、493キロ……もうリニアモーターカーに匹敵する速さですよ」

「中学生でも全国行ったら多分180、190キロのスマッシュを打てる人の方が普通かもしれない」

「由規のストロークよりも速いじゃないですか！」

「う、うん。まあバドミントンと野球じゃ速さの基準が違うからね」

「へえすごいなあ。バドミントンって……」

「バドミントンって速さだけじゃないんだよ。時には優しくヘアピンをかけることも必要。その時のフォームがまた芸術的だったりするんだよ」

そう興奮しながら相生はしゃべった。

「私強くなりたいな。そしてもっとコートを弾丸で打ち抜きたい」

「強くなればいいさ。もっと練習して、もっと銃弾を増やしてコートを撃ち抜けば」

「そうですね」

「というわけで佐古の弱点は持久力。今から外に出て走りこむぞ」

「今、走ったら多分死ぬと思いますけどね」

「さっき粉骨碎身するって言っていたでしょ」

「それ聞いていたのですか。ってか流石に命までは削りたくないです！」

そしてそのまま今日の練習を終えた。夙川は外で先輩達を待っている。とその前を函南が走って通りすぎる。

「函南さん！」

それを見た夙川は思わず叫んでしまった。そして函南は走るのを一旦やめる。

「……確か……誰だっけ？」

「名前を憶えて下さい！ 私は夙川です！ 夙川佐古です！」

「ああ、夙川佐古か。敵の名前を忘れるわけないでしょ？」

「今、忘れていましたよね」

「忘れていたわけではないよ。最初から知らなかったんだ」

「……そっちのほうがもっと最悪ですよ。それよりも何をしていたのですか？」

「……敵には教えない」

「教えて下さい」

そして函南は走りだした。その後を夙川はついてくる。

「なんでついてくるの!？」

「函南は目を三角にして夙川を睨んだ。」

「どうせ私に負けたのが悔しくて走りこみをしているのですよ。なら私も函南さんに追い抜かれないように走ります」

「うるさい、ついてくるな!」

空はオレンジ色に染まり、夙川は函南の影を踏もうとして函南は夙川に影を踏まれないように逃げていた。この影踏みはしばらく続くのであった。